

良かった。

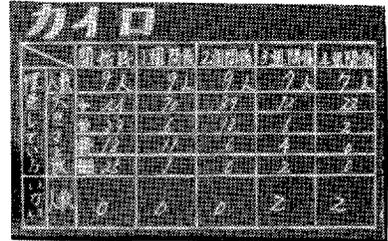
2. ホットバック、調査中に悪化した例もあり良い結果はみられなかった。
3. 電気アンカ、ベッドの中だけの保温のためか結果は良くなかった。
4. 足袋、これは日中車椅子上での保温であったが、治癒した例はなかった。
5. カイロ、足袋やブーツを使用しカイロを併用し、体温だけの保温にカイロの熱を加える事により結果を期待した。

起床時から消灯準備まで使用し、表2の様な非常に良い結果が得られた。患児からも自由時間を束縛されないため喜ばれた。介助者も、手がかからず好評だった。

II 結果と考察

以上各対策を試み、単独の対策では治癒には至らず種々併用しなければ患児の苦痛を柔らげることが出来なかった。特に発赤、掻痒感のある患児には足浴、足袋、外用薬、マッサージ、カイロの併用が有効であった。調査期間内の凍傷の状態は大きさにおいては発赤0.5 cm以下が最も多く、部位は指、外側、踵部の順に発赤し、重症のものは殆んどみられなかった。

私達は、これからも種々のデータにより調査を継続し、凍傷罹患児の減少に努めたいと思います。



18 P M D 重症児の生活圏

国立療養所東埼玉病院

成 富 明 子	前 川 光 子
村 松 直 子	平 山 千 枝 子
今 井 さ つ き	富 田 光 子
桧 山 豊 子	

〔はじめに〕

当病院の筋ジス病棟は、開棟以来7年目になります。入院患児107名中、障害度7度8度児

(スインヤード)は38名で、全体の35%を占めています。この重症PMD児が現在どのような日常生活を送っているか、又負担になる事はないかを改めて調査したので報告します。

I 方 法

- 1) 対象患児 当院に入院中の患児 5 名
- 2) 障害度 スインヤード 7 度及び 8 度
- 3) 年 令 15~20才の男児
- 4) 調査期間 昭和52年 4 月から10月迄
- 5) 調査内容

表 1 のように 27 項目について起床前、下校後、車椅子上、入浴前後及び、行事参加前後に調査しました。

II 結 果

5 名の患児を A、B、C、D、E、とし検討しました。それぞれの患児に共通して車椅子上では、殿部痛の訴えが多く次に四肢の冷感、しびれ感、行事に参加した翌日は、顔色不良、疲労が認められ、院外の映画会に参加後 B 患児については脈拍に大きな変化がみられ 1 週間以上も安静を必要としました。臥床時は患児によって異なるが、ラジオ、テレビ、新聞、雑誌、詰将棋、手芸等で過ごし電動車椅子乗車日は、行動範囲も広く、野球、ホッケー等楽んでいる患児もありました。

表 3 は 1 ヶ月間に患児が訴えた回数を表にしたものです。各患児の訴えを総合してみると、車椅子上の各部の疼痛が一番多く、これは障害度が増す毎に見られる、るいそうによるものと思われます。車椅子上では体温、脈拍、呼吸、血圧については、1 日を通して殆んど変化はなかった。入浴は週 1 回が多く、入浴時間は約 15 分程度で、入浴後も疲労感認められず、訴えもない為、適当な時間の様に思われます。行事については、事前に体調を整えてから参加しており、当日の患児からの訴えは比較的少なかったが、夜間の体位交換数の増加、翌日の疲労感、脈拍の異常等を認める事があり、参加時間等は検討の余地があると思います。

III 考 察

障害度 (スインヤード) 7 度 8 度児は、ベッド上での

表 1

表 2

患児	起床前	下校後	車椅子上	入浴後	行事後	臥床時
A	0	0	6	2	2	0
B	0	0	5	2	2	0
C	0	0	5	4	1	0
D	0	0	12	6	0	0
E	0	0	13	4	0	0

表 3

患児	顔色不良	疲労感	手足の冷感	顔色不良	手足の冷感	夜間の体位交換数	翌日の疲労感	脈拍の異常
A	+	+	+	+	+	+	+	+
B	+	+	+	+	+	+	+	+
C	+	+	+	+	+	+	+	+
D	+	+	+	+	+	+	+	+
E	+	+	+	+	+	+	+	+

生活時間が長く、患児の余暇については忘れがちになるが、このような患児こそ種々の欲求を心の中に秘めているに違いない。もっとみんなと一緒に遊びたい。勉強もしたいと……。しかし、ベット上で出来る事は限られています。この調査の結果を参考にし、個々の患児にあった生活圏を作成し、有意義に過せる様に援助していきたいと思ひます。

19. PMD児に電動車椅子を使用して

国立療養所東埼玉病院

大野 美佐子 佐藤 るみ子
後藤 雪美 河野 久美子
窪田 冊子

〔目 的〕

PMD児は障害度進行に伴い、閉鎖的で、内向しがちな傾向を示す。そこで電動車椅子を使用することにより、残存機能維持生活範囲の拡大から、明るく楽しい療養生活ができるよう、調査研究を試み、好結果を得ることができた。

〔方 法〕

当院での実態調査、全国筋ジス収容20施設における電動車椅子使用の現状調査、。

〔結 果〕

成長とともに、障害度が進行しているPMD児は、電動車椅子をどのように思っているのか、これまで漠然としか捕えていなかったことを、明確にすることができた。

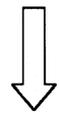
乗車希望の最大理由「どこでも自由に行ける」ということから、走行距離の測定をしてみた（表4）の通り、実際の行動範囲の拡大を知った。

もう一つの希望理由「疲れない」ということから、主に脈拍とBD測定により、手動電動車椅子別に、身体的影響を比較してみると、脈拍は両方とも、下車後の変動はほとんどないが、BDは両方とも、下車後やや上昇しており、上昇率手動54%、電動40%と、手動の方がやや高い。

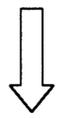
次に（図2）の、全国における電動車椅子使用状況によ

表4

手	A	上肢機能低下しており行動範囲の狭い患児	1.54
動	B	行動範囲の広い患児	3.00
電	C	乗車時間の制約を受け行動範囲の狭い患児	1.88
動	D	行動範囲の広い患児	51.78



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔はじめに〕

当病院の筋ジス病棟は、開棟以来7年目になります。入院患児107名中、障害度7度8度児(スインヤード)は38名で、全体の35%を占めています。この重症PMD児が現在どのような日常生活を送っているか、又負担になる事はないかを改めて調査したので報告します。